

[第12回学術集会シンポジウム：家族看護における文化的能力]

## 家族看護実践における文化的能力 —「文化」の視点を取り入れた家族看護の可能性—

千葉大学看護学部

岩崎 弥生

### I. はじめに

「文化」概念の定義は変遷の歴史をもち<sup>1)</sup>、人類学者の数だけ定義があるなどと言われている<sup>2)</sup>。本稿では、「文化」を、特定の集団のメンバーによって学習・共有される行動様式や生活様式を規定する前提と定義する。また、同じ人間集団内の差異(たとえば、年齢、性別、階級、民族的なサブグループなどによる差異)を内包しているものとして、「文化」をとらえる。

### II. 文化的能力

文化的能力(cultural competence)は、人種的にも民族的にも多様性が増大している米国で、保健医療へのアクセス及び保健医療の質における民族間の格差や差別を縮小することを目的に発達した。文化的能力は、しばしば、対象者の多様な価値観や信念を理解し、彼らの社会文化的・言語的ニーズを満たすことを意味する<sup>3)</sup>。

しかし文化的能力が目指すところはもう少し広く、「一つのやり方に全員を従わせる」といった現行の保健医療システムから、多様な対象者に対応できるシステムに転換することを含んでいる<sup>4)</sup>。つまり、多様な対象者のニーズに個別に配慮するということである。これは、当事者の視点からヘルスケアを組み立てることを意味する。したがって、私たちには、個々の家族の声を聞き取る能力が求められてくる。

### III. 「文化」の視点

#### 1. 多層性

江口<sup>5)</sup>は、臨床の現実が単一ではなく、「画一的なものへと収斂する求心的言語と、そこから逃れるように個性性、多様性へと拡散する遠心的言語が交錯して」いることを指摘し、「文化」の視点が臨床の現実の多層性を明らかにできるとしている。つまり、「文化」の視点は、求心的言語(例えば診断)と遠心的言語(例えば個々の患者の苦悩)の間を往復しつつ、誰にとっての現実なのかを問いかけながら、絶えず土着的、個別的な文脈に立ち戻ることを可能にする。土着的な文脈に立ち戻るとは、「現地人の声」すなわち「当事者の声」に耳を傾け、「当事者の視点」から現実を再構成することを意味する。

#### 2. 多様性

「文化」の視点は、また、事象の多様性・状況依存性を前提としている。したがって、「文化」の視点からは、どのような形の家族も存在しうると考える。たとえば、一つの家族のあり方や機能の仕方が主流であるとしても、それが絶対的、普遍的なものだというとは考えせず、そうした家族のあり方や機能の仕方は、ある特定の時代の特定の心理社会的背景から生じたものだといった考え方をする。

換言すると、「文化」の視点に立つ看護職者は、どのような家族であれ、そのあり様も機能の仕方も含めて優劣や善悪の立場から理解するのではなく、その文脈からとらえることになる。そして、自文化の絶対性を疑い相対化することで自分の事象のとらえ方を問い直し、異質なものを排除するのではなく受け

入れていくことができるような自分を創っていくことになる。

### 3. 看護文化

その他、「文化」の視点では、看護も一つの文化であり、看護の専門的知識体系も、文化的文脈に立ち現れるひとつの現象として理解する。たとえば、家族システムといった概念は家族看護の重要な概念ではあるが、そうした概念自体、一つの時代の特定の文化の「家族のとらえ方」にすぎないと考えるわけである。

専門知識体系が時代と文化の制約を受けるのは自明のことではあるが、しばしば私たちはそれを忘れ、現存する知識が絶対であると考えた傾向がある。「文化」の視点は、そうした知識の絶対性を問うことを可能にする。同時にそれは、看護そのものを文化としてとらえる視座も提供する。つまり、私たちが家族と接するときには、私たちだけではなく、家族も異文化体験をしているということである。このことは、私たちのリアリティが家族のそれとだいぶ異なるかもしれないということ、私たちがもうひとつのリアリティすなわち家族のリアリティを発掘しなければならないということ、家族だけではなく私たち自らも変容する関係を作る必要があるということの意味している。

## IV. まとめ

まとめに代えて、阿部年晴<sup>6)</sup>の論文から、エシュという神の話を紹介する。

ナイジェリア西部に住むヨルバ人は四百を越す神々を擁する万神殿を持っているが、その中でも至高神に最も近い強大な神にエシュと呼ばれる神がいる。エシュの特徴のひとつは、両価性や曖昧さにある。…ヨルバ人のイメージの中でエシュは時に老人であり、時に幼児であり、あるいは、同時に老人でも幼児でもある。エシュはまた、賢者であると同時に愚者であり、そもそもエシュにおいては、この二つは盾

の両面でしかない。自分の内に相対立する極を持っているエシュは、世界の異なる領域を往還し結び付ける使者である。…エシュのもう一つの特徴は、手に負えないいたずら者だということである。エシュのいたずらは、平和なところに争いを、秩序と調和が支配しているところに混乱を持ち込むという形をとることが多い。争いのない模範的な家庭があるとか、決して争ったことのない友情の鑑のような親友がいる、などといううわさを耳にするとエシュは不機嫌になる。面目にかけても騒動を起こしてやろうと、早速出かけて行って得意のトリックをつかって混乱や争いの種を播いて一騒動引き起こす。エシュは、時には幼児のように無邪気に社会の常識や掟を無視し、時には経験を積んだ老人の知恵によってそれをからかい批判する。いたずら者としてのエシュは、同時に、見せかけの平和の中から不和の種をあばき出して混乱を招きよせ、より包括的な活力ある秩序を形成することを助ける生成と偶然の神である。ヨルバの万神殿では、エシュは、秩序と必然の神よりも格の高い神とされている<sup>6)</sup>。

エシュの神話は、人間界の事象が多層的・多面的であり、ひとつの枠組ではとらえきれないこと、混乱や不和からより高度な秩序が構築されることを示唆している。多層的な家族の現実をとらえるには、やはり複数の視点やアプローチが必要になる。さらに、混乱を歓迎するといった視点も家族看護実践においては必要なかもしれない。

## 文 献

- 1) 太田好信：文化，浜本 満・浜本まり子編，人類学のコモンセンス，pp. 1—20，学術図書出版，2003
- 2) 山下晋司・船曳建夫：文化人類学キーワード，有斐閣双書，2002
- 3) Betancourt, JR: (2002) Cultural competence in health care : Emerging frameworks and practical approaches. The Commonwealth Fund Report, <http://www.cmf.org/>
- 4) Betancourt, JR, Green, AR, Carrillo, JE, & Park,

- ER : Cultural competence and health care disparities : Key perspectives and trends, Health Affairs, 24 (2) : 499—505, 2005
- 5) 江口重幸 : ローカルな声を聞く—人間科学としての多文化間精神医学をめざして—, 文化とこころ, 32—39, 相川書房, 1996
- 6) 阿部年晴 : 老いの価値, 多田富雄, 今村仁司編, 老いの様式—その現代的省察, 229—257, 成信書房, 1987
-